

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號三第卷十五第

月三年五十和昭

論叢

勢力加速度の法則……………文學博士高田保馬

日本經濟理論に於ける主體性の發展……………經濟學博士石川興二

時論

地方稅制の改革を論ず……………經濟學博士汐見三郎

研究

ナチス住宅政策の原理……………經濟學士中川與之助

金史食貨志に見はれたる貨幣思想……………經濟學士穗積文雄

貨幣の資本的考察……………經濟學士中谷實

說苑

北支に於ける人口の分布と變動……………經濟學士菊田太郎

農業に於ける保險と信用の問題……………經濟學士西藤雅夫

パウル・アルント・日本に於ける低勞賃……………經濟學士青山秀夫

附錄

彙報

外國雜誌論題

經濟論叢

第五十卷 第參號 (總卷第百九拾七號)

昭和十五年三月發行

論叢

勢力加速度の法則

高田 保馬

われらは一の英雄、一の王朝又は一の宗教の勃興期に於て、それが如何に急速に勢力を獲得して支配的地位にまで上昇するかを見る。所謂宏大なる社會の一細胞ともいふべきものが如何にして其勢力をもち得るかといふことを説明するものは、勢力加速度の法則である。而もそれを立入つて分析するときは、諸種の勢力の間常に種々なる連帶の關係あり、其一が得らるるときには自ら他のものが従つて得らるる關係あるのを見る。

茲に勢力加速度の法則といふものはある主體たとへば個人又は集團が一定の勢力をもつに至る場合、此勢力は連帶の關係によつて他の勢力をよび集め、それが基本となつて更に他の勢力を集める、かくて急速に其大きさを加へてある段階に達する、といふ關係をさす。これは外見的には資本蓄積の法則と類似する。一たび資本を獲得す

るときはその資本によつて利潤が得られ、利潤が集積して資本は急速に増加する。けれども、これは單なる類似ではない。實は勢力加速度の法則の一の特殊なる場合として、資本蓄積の法則があると思ふべきであらう。

勢力加速度の法則の一の支柱は一の外的勢力が容易に他の外的勢力の獲得手段として利用せられ、それがどこまでも進行し得るといふことにある。資本蓄積の如きは明にその一の場合である。けれども、その中心的なる支柱と見るべきものは、外的勢力が内的勢力をよび起し、前者が後者にまで轉化するといふことである。如何なる專制君主といへども國民の同意なくしてその政權を維持し得ずとはくりかへし主張せらるる思想であるが、それは複雑なる含蓄をもつにしても、これが一としては次のことをあげねばならぬ。專制君主は行使する權力そのもののゆゑに内的服従をかち得る、即ち國民はかすかながらに尊敬をもち、それに基いて忍び得る限りは默認の形に於て同意する、少くも忍び得ざるほどに其生存其利益を危くせられざる限り反抗することがない。これあるがゆゑに其專制的態度を維持し得る。これを支ふるものの一としては、權力が尊重をよびますといふ平凡なる一事實をあげねばならぬ。いふまでもなく外的勢力のみによつて新なる外的勢力を得るのにはせまき限度がある。それは外的手段の行使そのことにまたねばならぬし、此行使は一方に實行すると他方に之を實行しがたい。勢力はつねに輻射の如く八方にひろがつてゆくのであるが、此輻射は一方だけにしか作用せぬ外的手段の本來なし得るところではない。勢力の増加乃至成長は外的勢力を以て外的勢力を得るといふ過程によること甚だ困難である。勢力の加速度の中心をなすものは如何なる種類たるを問はず勢力の存するところ内的勢力の歸屬することである。けれども、内的勢力はそれが單に内的勢力として止まる限りは外面に顯著なる表章をもたぬ、それが外的

勢力として組織をもち作用を営むときに、その強さがはじめて明確に印象せられる。而して此外的勢力が新なる内的勢力の成長をひき起す。かゝる事情から考ふると、勢力加速度の法則の中心をなすものは、外的勢力がつねに内的勢力を伴ひ、その一面と化してしまふこと、即ち外的勢力の内的勢力化にあると思はれる。

新しき勢力の伸張しようとするときには、それが如何なる範圍に於けるを問はず、常に出發點なる主體(個人又は若干の人の集團)がある。これを中心として、その内的勢力が形成せられる。これは大體、その人格の力にもとづくところの威光であるか、又は傳統による尊貴に基づくところの威光であることを一般とする。この内的勢力の所在即ち座ともいふべきものは、空間的又は階級的に其側近にあることもあり、又は離れたところに散在してゐることもある。これらの内的勢力を形づくるもの即ち從屬者たちはみな主體の勢力を作り上げるモメンタムであるとともに、彼等の集團がやがて一の外的勢力の手段となり、主體の外的勢力が築き上げられる。主體の意志はすべてこれらの勢力に支持せられて作用する。主體の具體的なる勢力にとつては、これらが能動的なるものであり、第一次的なる部分である。更に此從屬者たちと主體との間を結ぶものとして、利益の關係がある。即ち彼等の間に勢力又は地位の上の、又は富の上の利益關係が成りたつて之を結びつける。さて、中核をなす所の從屬者たちの支持によつて形成せらるる一の勢力は、受動的立場をとる人人の支持をうける。これは進みて此勢力に反抗するのではなく、さればといつて從屬者として忠誠又は獻身の態度をとらうとするのでもない。これらの多くのものは空間的に、又は階級的に、又は事態的に(たとへば宗教に無關心なるものはある宗教的勢力に對して)無關心の態度をとり、それに介意し干渉するところがない。けれども他の部分は此勢力と交渉をもちながら、その主張、

意志、傾向等に對して默認の態度をとる。立入つていへばその勢力の存立を承認して、それに背かうとしない。いはゞ此勢力に對して受動的消極的なる支持の態度をとる。これは數量に於て相當に大多數を占むるものの態度である。ところがこれらのものの存在そのことが問題とする勢力を強くするに役立つ。默認して強ひて反抗の態度をとらざるものは相互に牽制する。他もまた其勢力を認容して之を支持するものなりとするが故に、其勢力はこれらの人人の服従によつて支持せらるることとなる。此服従は二の層より成る。一の層はその勢力に對する默認、反抗の消極的態度である。他の一の層は社會のかくまでに多數のものが承認するものならば服従せざるを得ずとなし、進みては此勢力に對して内的なる支持をも辭しまいとする態度である。而してこれは周圍の人人の單にかゝる消極的承認の態度をもつことを知らず、内心よりの從屬者なりとする意識の上に立つ。いはば社會的擬態ともいふべき事情にもとづくものである。社會的擬態はある勢力に對して中心より從屬し承認せざるに拘はらず、反抗し對立するだけの決意をもち得ず、單なる消極的默認によつて内的に從屬をしてゐるかの如く見せかける集團的態度をいふ。而して此周圍にある所謂無關心なるものの態度が何等此勢力に對する反抗壓迫の態度に出でざること、進みてそれの一種の認容として認められる。彼等の存在は此勢力の成長に寄與することなきが如くであるが一たびその成立したる場合にあつては、これを愈々強く確立せられたるものであるといふ一種の保證、認容を與ふるには役立つ。

ある主體を中心として出發する勢力は此の如く、中核として成立する集團いはゞ追隨者、使徒、家來、味方といふが如き積極的支持者の一團の外的勢力によつて周圍に多數の默認者非反抗者をつくり、その相互牽制、い

はゞ社會的擬態によつて其勢力を伸張する。これらは消極的支持者ともいふべきものであり受動的部分である。ところで此勢力伸張又は勢力擴充の過程は更に組織の勢力を利用することによつて強化せられ短縮化せられる。一定の組織があり、それが社會のある要求をみたすものとして存續してゐるとする。問題とする主體の勢力が其成長のある段階に於て其積極的支持者の助力により、客觀的持續的組織の權力を把握するに至るとしよう。此組織が一定の社會結合的地盤を有し、此結合のゆゑに組織の權力(例へば國家の、又は教會の、組合の)が成立してゐる以上、此集團の中心的なる部分が自ら積極的支持者の中に移行する。此權力と主體の人格的勢力とが融合する限度に於て、集團權力に對する支持は自ら此主體の勢力の支持とならざるを得ぬ。たゞ此二者が融合するといふのは、權力の運用が完全に此集團の伸展の方向に沿ひ、従つて此人格への信頼を深むることによつて、人への從屬やがて權力への從屬なりと意識せしむること、又は此主體の權力獲得の事情條件によつて二者が全く切りはなし難く結合せりと意識せらるることをさす。次に此組織に屬するところの成員がすべていはゞ前に述べたる默認の態度をとり消極的に其勢力を支持するものとしてつけ加はる。勿論組織の權力と主體の勢力とはある程度まで切りはなししては考へらるるけれども、主體の勢力の伸張に對しこれが有力なる乘數的作用を營むことは争ひがない。要するに、一定の中核によつて成立してゐる一定主體の勢力は組織の權力を獲得するに及び、一方此權力の一部分が固有なる、従つて一種の內的勢力にまで移行するとともに、權力がそれによつて行使せられ、單に默認的なる認容によつて成立する勢力の限度をこえて、主體のもつ勢力は擴充せられてゆく。

此勢力加速度の原則は勿論ある限界までに作用するものと見ざるを得ず、それに無限なる作用の餘地が與へら

れてゐるわけではない。所謂成長の法則といふものの適用が此場合にもまた考へられる。成長の法則といふのはある生命的なる事象が増加し進展するに當つて、其歩調又は速度が一定の數量的規律に従つて動くことをさす。一定の有機體の體重身長等の發達から一國人口の増加一種の新商品の普及等に至るまで、はじめ其増大進展の程度小であるが、一定の時期に達して極めて急速に増加し、やがて徐々に此増加の勢を失つて停滯に入るといふことが、それに含まれてゐる。それは成長の初期に於ける加速度の法則の作用と終期に於けるその減衰とをあらはせしめる處である。ある主體のもつ社會的勢力、いはゞその勢力的優越が如何にして成立するかもまた、勢力が一方社會的なる事象であるとともに、他方數量的なるものである限り、やはり成長の法則に従はざるを得ぬ。従つて、勢力の増加が加速度の法則に従つて進むにしても、それはやがてある限界に近づくにつれて速度をゆるめ、やがて停滯の狀況に入る。さきの説明を進めて此點を明にしようとすると、次の如きものとなる。一定の勢力主體が其人格又は傳統に基く尊貴によつて勢力中核の中に座し遂に一定の外的勢力を掌握し得たとする。此外的勢力は自ら此勢力に對して從屬するもの間に自發的なる尊重の傾向をよびさまし、内的勢力がそこに成立する、といふよりも寧ろ外的勢力がある限度まで内的勢力化する。然るにかくして新に獲得せられたる勢力が自ら新なる勢力の獲得に利用せられる。けれども此勢力擴張が必ずある限界につき當る。その理由。一方に於て、ある一定の資格を具有してゐる人人の數(たとへば一民族の總數、一宗教に屬する信者の數の如く)に限界があり、所謂默從の態度をとるものの増加がかゝる限界に達するとせよ。問題とする勢力はこれをこえて伸展しがたい事情にある。これは勢力の増加に對する外延的なる限界である。ところで、勢力の増加は他の意味に於て一の限界をもつ。そ

れはいはゞ内包的限界である。ある主體に從屬してその勢力を築き上げてゐる人人の態度を見よう。彼等は主體の勢力ことにその外的勢力の伸張につれて内的なる服従を強めてゆく。けれども假に此服従の強化を阻止するが如き事情なしとしても、此服従することそのことには一定の限度がある。生活の要求がある程度まで自己の利益合理的態度を必要とする以上、その限度をこえて相手に自己を獻げ、自己の服従的態度を強めることは出来ぬ。また此限界に近くにつれて服従の態度を進むることが困難となるはずである。これは勢力の増加に對する内包的なる、又ある意味に於て絶對的なる限界である。けれども、問題とする主體の勢力の伸展は此限界内にあつても更に他の障壁によつて制限せられる。それはいふまでもなく、他の勢力の存立又は伸展である。これは必ずしも、二の勢力の基いてゐる文化又は生活内容が同一であるとか、平行的であるとかいふ場合に限るのではない。たとへば一の主體の勢力が上に述べたるが如き過程によつて増大をつゞけると、此主體が宗教的方面に於ける卓越によつて勢力中核を作り上げ、その作用によつて勢力獲得過程を前進したとせよ。それに對して障壁をなす他の勢力といふものは、決して宗教の方面に於て此人と相對立する資格と聲望とをもつ人のそれであるとは限らぬ。生活の全く異なる範圍たとへば政治的方面の事情から勢力を得たるものといへども、やはりそれが勢力をもち、従つて成員をして今まで以上の從屬的態度をとらせぬといふ場合にあつては、而してかゝる態度を有効に支持せしめ得る場合にあつては、問題としてゐる勢力は其成長の絶對的ではないが相對的限界に達し、それをのりこえることが出来ぬ。

かくて一定の勢力は加速度の法則に従つて其増加をつゞけても、結局ある點にいたつて周圍の事情の障壁の爲

にそれ以上の進行を停止するに至る。いはゞ周圍の狀況と均衡を保つに至つて止む。たゞたえず力の欲望に驅られてゐる故に、勢力擴充の動力が作用してゐるゆゑに、事情が變化しきへすれば、それに乘じて新なる伸張をはじめようとする傾向が勢力に内在する。けれども此點について靜的勢力と動的勢力との區別を考へたい。

勢力に動的なるものと靜的なるものとを區別しよう。それは上昇の傾向を内在せしめてゐるか、然らずして下降の傾向を内在せしめてゐるかの區別に外ならぬ。たとへば今上の例に於て示したるが如く、人格又は傳統の故に內的勢力をもつものが、一定の勢力中核としての周圍の追隨者の集團を有すとする。而して彼等の勢力要求の作用によつて、いはゞ消極的なる支持者をも獲得するに至るとする。此際、主體のもつ勢力は常に増加の傾向をもち續けてゐる。いはゞ成長の法則に従ふ曲線上の上昇部分にある。勿論増加の勢が行きつまるころには周圍の事情の爲に阻止せられてあるのであるから此事情が取除かれると、勢力増加の運動が開始せられ得る。増加の傾向を内に藏するとき、それは動的なる勢力であるといふ。

たゞ勢力が屢々停滯保守の狀況に陥ることは多い。それは勢力の主體又は之を支持する中核の側に於て、もはやこれを伸展せしめようとする要求を缺く場合である。(1)主體又は中核たる積極的支持者の側に於て、一は其勢力の獲得と共に力の欲望がある程度まで充足せらるることにより、進みてはそれとともに相伴へる實質的要求(主張、信念の宣布、合理的なる、又は利害に根ざす政策方針等)をも勢力によつて實現し得たるが爲に、當初の緊張を失ひ、又熱情奮闘の努力を缺くに至る。而してたゞ獲得したる勢力を、何等かの制度の形式に於て固定化し確保することによつて之を失はざらむとする。(2)進みては次の如き事情をも考へ得る。勢力の獲得は自ら其生活の狀況

を變改する。此生活狀況の變改が勢力の中心たる主體をして、ひいては其勢力の中核として之を支持し進みて獲得せられたる勢力の分掌により地位を高めたる人人、いはゞ支配的地位にまで高まれる一團の人人をして、かゝる勢力所有者として不適當なる性質資格を有せしむるに至る。此變質は勿論一朝にして行はるるのではなく年月の間に徐々に行はるるか、進みては世襲相續等何かの形に於て行はるる以上、幾世代に亙り遺傳風習傳統の作用を通してはじめて行はれる。これについては別に詳論する必要もあると思ふが、主としてかういふ點を注意したい。安易なる生活狀況は其精進の氣を失はしめ、人格に於ける卓越せる諸特徴を減衰せしめる、それとともに勢力が動もすれば、餘りに私利の爲に濫用せられ、従つて傳統的に威光をもち得たるものといへども、或は周圍の反感によつて之を失ひ、或は其人格に對する評價の故に内心よりの尊重を失ひはじめる。これら及びその他あまたの諸事情の爲に變質が行はるるや、當初に獲得せられたる勢力はたゞ外的組織と傳統の力によつて、從來の勢力を維持しつゞくるだけに止まる。いはゞその勢力に値する主體的條件乃至資格は著しく失はれてゐるけれども、たゞ外的形態としての勢力のみが惰力によつて支持せられる。而も此勢力の支持者自體がそれを擴充せしめようとする要求をもつことも出來ぬ。之をもつにしては當初の勢力獲得に役立つて來たところの數多の屬性又は資格を喪失してゐる。

かくて、これを大體から見ると、勢力加速度の法則によつて其極限に到達するまでの勢力は、いはゞ動的勢力である。ところが勢力の飽和點にまで到達するや、早晚勢力要求といふ發條を失つてしまふ。而して勢力はたゞ固定的なる組織と傳統との力によつて維持せられ、保守と強權との惰性によつてのみ存續し、作用してゆく。い

はゞ勢力が靜的のものとなり、地位をもつものすべての努力は此組織の固定そのことに集中せられる。此の如へ内に伸張の傾向を失へるところの勢力を稱して靜的勢力といふ。かゝる勢力は容易に一轉して減衰の方向に向つて動く。勢力が減衰、ひいて没落の方向に進むときに於ても、それは消極的にはあるが、動的性質を帯びる。而して前と同様に、一種の加速度の法則によつて支配せられる。

靜的勢力といふものは常に空虚なる威容を誇る城砦の如きものである。之を固守すべき實力は既に失はれてゐるけれども、たゞ傳統的組織のゆゑに、それが反抗しがたき壓迫の能力をもつものと認めらるるが故にのみ、何人もこれを破壊しようとしぬ。一たび之を破壊しようとするときには、如何に基礎の薄弱であつたかが明となる。

大體に於て勢力の喪失又は減衰の過程は次の如くに考へ得ると思ふ。まづ勢力中核を確立し得たる所以の個人的又は集團的屬性がやがて失はれる。即ちその政治的又は軍事的に優越せる能力、宗教的信念の深さと宣布の能力といふが如きものは其一代を以て終る、一代の間にあつても生活狀況が地位と共に變化するにつれ失はるゝことと少くない。別して勢力の獲得享有そのことの中に其卓越性を奪ふものが多い。このことは勢力の中核をなすと述べてきた從屬者についてもあてはまる。彼等は生活環境の恵まるゝにつれて、緊張を失ひ徳性を失ひ氣力を失ふ。このこと、勢力の主體とこれらの中核を通し、世代を重ねて顯著となる。いはゞ内的勢力の源泉たる主體の資格そのものが消滅するとともに、勢力中核の實質即ち彼等の主體に對する從屬と從屬に基いて外的勢力手段として作用する能力とともに失はれる。いはゞ加速度の法則によつて其絶頂にまで到達したる勢力は早晚、中核をな

すところの内的勢力がその源泉の枯渇とともに失はれる。それにも拘はらず、靜的勢力として存續し得るのは外の組織のゆゑであり、之を一面から見ると社會的擬態のゆゑである。けれども依然として把握せられてゐる外的勢力はやがて此個人的屬性の變質のゆゑに、集團の發達乃至成員の諸要求とはちがふ方面に行使せられる。いはゞ此外的勢力に従屬せる人々の要求もあまりに背ける方向に動く。或は能力の低下のゆゑに判斷を誤り全體の立場を危くすることもあらう。徳性の低下のゆゑに又は階級の利益を計るに急にして彼等を過度に壓迫し其生活を困難にすることもあらう。何れにせよ、組織のゆゑに従屬せる人々は必ずしも利益を求め保護を求めて従屬してゐるわけではなく、從屬の中心を求めて、いはゞある點まで從屬の爲に従屬して居るわけであるけれども、従つてその利益が壓迫せられたからとて直に離反し反抗し得るものではないけれども、此忍従にも一定の限度がある。これを越ゆるときには、一部のものが決意して其態度を改める。これは必ずしも表面から反抗對立の旗幟をひるがへすことではない。結局今までの從屬の態度をすて、或は關心のない態度にうつることである。或は此勢力の及ぶところの生活方面の如何により單に無關心の態度に出で得ず、何れかに從屬せねばならぬときには、反對の立場にある勢力への從屬へと移行する。けれどもかくしていはゞ社會的擬態によつて、表面的にのみ從屬したるもの、一角がくづれるといふことは、問題とする勢力の上に決定的なる變化の方向が與へる。

若し問題とする勢力の行使が更に認容しがたき方向に進むに及びては今まで周邊にあつて單に受動的認容の態度に出でたるものから明に反抗的なる態度に出づるものを生ずる。而してかゝる態度を周圍から壓迫しようとするもの、ない段階に達しよう。蓋し彼等は此勢力の行使によりて保護をうけず、損失を與へられて居り、むしろ

内心これに對する反抗の意識をもつてゐるからである。そこでかの勢力は一角から崩壊する。所謂鼎の輕重は問はれたるわけである。勿論これらの反抗的な分子が結束して直に一の對抗的な新勢力を形成するとは限らぬ。或は特定の個人又は集團を中心として形成せられつゝある他の勢力に吸収せられその支持者となることもあらうし、たゞ分散せる反抗分子として何等まとまつた勢力をなすに至らざることであらう。何れにせよ舊き勢力の崩壊は急速に進行する。これが外廓をなし、その崩壊を支へてゐたところの消極的默從的要素の相互牽制が今や取り去らるゝからである。各他人が從屬するが故にのみ從屬の擬態をつゞけたるものであるから、他人の從屬の事實が否定せらるゝに及び容易に此擬態をすて、長き忍従からたち上る。ところで勢力の中核をなすところに今やこれを壓迫するだけの實力はない。勢力の崩壊は急速に進行せざるを得ぬ。かくて勢力の喪失は勢力の中心部分に於ける個人的別して人格的要素の變質從つてそれをめぐる内の勢力の減衰にはじまり、それに基づいて獲得せられてゐたところの外的ことに組織的なる勢力の喪失に終る。大體勢力の獲得喪失ともに加速度の法則に従ふと見らるゝのであるが、その部分を構成するところの勢力要素の獲得せらるゝ順序と喪失せらるゝ順序とは相對應する。獲得に於て最も早きものは喪失に於て早く、獲得に於て遅きものは喪失に於て最も遅い。獲得に於て困難なるものは喪失に於ても亦困難である。此點に於て、其獲得と喪失とに於て一のシメトリカルの關係が考へられる。

勢力の成長に於ける常道とも見るべきものは前述の如く内的勢力の獲得にはじまり、その外的勢力への轉化、次にその利用による廣範圍の外的勢力の開拓、その内的勢力への轉化といふ順序をとつて進む。征服國家の

形成の如く外的勢力から出發するが如くに見ゆるものとても、此外的勢力はやはり征服種族に於ける内的勢力から出發してゐる。ところで所謂勢力の母體とも見るべき内的勢力の存続する間は、いはゞ積極的支持者の支持の強力なる間は、勢力が容易に減衰することがない。此勢力の弱まるゝことが凋落の第一歩である。而も組織が確立せられてゐる以上、外的勢力は容易に崩壊せず、勢力減衰のはじめの過程は恰もその成長の過程に於けるが如く遅々として進まず、たゞある時期に入り、消極的なる支持者の側に於ける反抗の公然と表明せらるゝに至るや、相互牽制の壓力は撤廢せられ愈々崩壊の過程に入る。これは勢力の喪失過程に於ける加速度の法則の作用を示すものである。而して、此喪失の過程に於て最後に失はるゝものは何であるか、それは外的組織によつて支持せられたる勢力である。而もこれこそは獲得の過程に於ても最後に得られたるものである。而して、最初に得られたるところの母體たる内的勢力が喪失の過程に於ても最初に失はれる。更に注目すべきことは、勢力の喪失が加速度的に進行したる最後の點に於ても、なほそこに必ず殘存するものがある。それは例へば過去の外的勢力に伴ふ尊貴である。これが多くは出生に伴ふ尊貴として、又はかつての地位に伴ふ尊重として、一種の内的勢力を形成する。これこそは獲得過程の最後の段階とも見るべき組織による外的勢力の收得の結果として成立したるものであるが、これだけは決して完全に減びることはない。これが屢々勢力復活の萌芽として作用することは、王朝の再興、豪族の蹶起等に於て最も明に示さるゝところである。

此の如くに見來ると、一の勢力は恰も生命あるものゝ如く、成長しやがて老衰して遂に凋落する。ところでこの成長凋落は如何にして行はるゝのであるか。勢力がつねに其主體即ちこれを獲得し所有するものゝ活動又は行

爲の效用によつて成立するといふ見方からいふならば、其説明は極めて容易である。たとへば一の職業の内容が社會にとつて貢獻するところ、即ち其效用が小なるときには其従事者の勢力も亦小である。效用が大なるときに勢力もまた大である（シミュラアの立場）。かういふ見解は常識に根ざすところ深いと思はれるけれども、その成り立ち難いことは割合に明であると思ふ。たゞ此問題の解決を效用一般に求めず、特殊の效用にもとむる立場が成り立ち得る。それは服従の要求を以て保護によつて自ら強くなり自ら高まらむとする意欲なりと見る。さう見るときには社會的勢力即ち服従せらるゝことは此保護乃至指導の機能を最もよくみたすものに與へられる。さうすると、ある一の勢力の消長隆替といふことも、極めて單純の理由から來るわけである。保護指導の機能を營むに適當である場合には其勢力を得、適當でなくなるときには其勢力を失ふ。けれども事實が果してさうであると許し得べきであらうか。かゝる主張はまづわれ／＼が勢力の加速度の法則を認むるときに、支持し得られざるものである。既に何等かの事情によつて勢力をもつものが容易に之を増大せしめ得るとするならば、勢力が保護の機能に適するものに歸屬するといふことはいへなくなる。若し從屬者が自己の判斷に従ひ、何人が指導又は保護の役目を營むに最も適してゐるかを決定し、これによつて從屬するか否かを定め得るものならば、さういふ結末に落ちつき得るであらう。けれども、勢力のあるところに尊敬が捧げられ勢力が集積するといふのであれば、つねに理論的の判斷が行はれてゐるわけではない。服従が究極には保護助長の効果をもつにしても、本來それは一の内的自發的傾向であり、而もそれはたゞ強きが故に服従するといふ形に於て行はれてゐる。それゆゑにこそ、社會の歴史には壓迫と絞取とがあまりに多く、勢力を有するものは保護と助長とに力むるよりも其地位を利用して

階級の利益を計るものであるとまでいはれてゐる。事實に於て從屬が保護を意味してゐるのは、從屬せらるるものが強者であり壓迫する地位に立つからそれへの從屬によつて之を緩和せしむることが一面に於て保護的なる効果をもつといふことではないか。勿論常人心理の法則又は常人の法則といふものと從屬との聯絡の存しないことはない。動物の群に於ても見張の番がありその通報に従つて動き、又は進みて先頭にたつものの跡に従つて移行する。渡り鳥の大群が空を渡るとき先頭の一鳥の向ふ所はやがて全群が潮の如くに流れゆく方向である。この低級なる一般的傾向がなほ人間の社會に於ても作用せずとしないであらう。追隨又は隨從といふことこそ、一般的には生活の最も安易にして危険少き方法である。それは一方に於て同胞即ち同一の社會の成員の側からの反抗を受けず、外部の壓迫に對しては共同なる抵抗をなし得る所以であるから、彼等は隨從によつて安固の感をもたうとする、これは一面から見ると保護を求めるといひ得ぬことはない。けれども追隨すべきものは無數にある、つまり成員の各自は皆追隨せられべき人であり、又種々なる行動の方向が皆追隨せられべき方向である。これが選擇を決するものは何であるか。或は偶然先頭にあるものの活動か、又は久しき經驗によつて進路を十分に承知せるものの活動であらう。ところで今問題としてゐる場合にあつては、從屬に於ける共同性にかゝる常人心理が作用するとしても、從屬に於ける追隨の方向は如何にして定まるか。それは勢力に於て強きものの指示する方向といふ外はない。勢力をもつものに對して從屬せざるを得ぬ、これは一種の內的なる傾向である。此傾向を各自が内に藏してゐるところに、まづ少數の人が從屬するといふことになると、いはゞ常人心理の法則がそこに作用する。他人も從屬するところに追隨的にわれも從屬しようとする、そこで所謂常人心理の法則に支配せらる

るといふことと、從屬するといふことは形に於て似てゐるけれども、實質に於ては別のことがらと見るべきである。今の場合に常人心理が作用するのは、勢力の所在に從屬することをある人がさきに實行すると、他人も亦これに從ふといふだけのことである。

かくて勢力の盛衰を單に效用又は價値によつて説明することは困難である。此效用を上述べたるが如く保護せらるること、指導せらるることの效用に限局しても、一方に於て從屬の意欲の方向乃至作用から考へ、他方から歴史上の事實に考へて、最もよく保護することによつて勢力を得、保護の能力を失ひ又は之を怠ることによつて勢力を失ふといふのは、ことの真相を説明し得る所以であるとは思はれぬ。要するに勢力の卓越せるところに勢力が歸屬し、勢力のあるところにその成長過程が進行するといふ外はない。それゆゑ、勢力の成長減衰の過程の何故に必然なるかは、別の原理によつて説明せらるることを要する。

たゞ上に述べたるが如く勢力の増大が成長の法則に從ふといふことは大體に於て一の比喩的なる表現であり。從つて現實の事實が正確にかゝる表現によつて捉へらるるものでないことを注意しなければならぬ。ことに注目すべきは勢力の増大が時として飛躍的に進行し、從つてそれが決して一步一步の前進ではない、といふことである。これを考ふる爲には部分の争鬭の事情を考へねばならぬ。たとへば一の生物有機體をとつて考ふるにしてもその各部分の器官進みていふに各細胞は一方に於て調和し協力して一體をなしてゐるけれども、他方に於て例へば營養の吸収に於てたへす見えざる争鬭對立をつゞけてゐると認められる。ところがこれと同様のことが社會の勢力關係についてもいはれ得ないか。社會にいくつかの勢力がある。例へば一の王朝の、一の宗派の、一の黨

派の、一の勞働組合の勢力といふものがあり、同時にこれらの各勢力はあまたの成員の勢力として分寄せられる。さてこれらの各勢力の間には互助協力といふ關係もあるが、同時にまた爭奪の關係もある。勢力とは服従せらるることである以上、一方の勢力は何等かの他の勢力を削減することによつてのみ増大する。此遂行の關係が明確に意識にまで上るときには勢力の支持者間に對立反抗を生ずるであらうが、さうでないときには、かゝる抗爭をひき起すことはないけれども、背後に於けるその關係の存立は争ひがたい。従つて、一の勢力の加速度的に伸張してゆくといふことは常に他の勢力を何等かの形に於て、又何等かの程度に於て侵蝕するにきまつてゐる。新興の勢力が弱小であれば他の勢力の之によつて蒙る影響も小であるけれども、若し前者が強力のものであるときは、既存の勢力がこれによつて取代られる。後者について見るにそれが前述の過程を通して減衰の段階に入る。